

聖霊シリーズ「預言の賜物」

1A 預言の性質

1B 旧約時代

2B 新約時代

2A 預言の三つの目的

3A 預言の賜物の使い方

1B 今日の預言

2B 聖書にある規定

1C 秩序の神

2C 預言の吟味

3B 偽預言者の扱い方

本文

私たちの聖霊シリーズの学びは、御霊の賜物を一つ一つ学んでいるところに入っています。今晚は、預言の賜物です。「1コリント 12:10 **ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。**」御霊の賜物の現れには、神の力が現われる賜物があることをお話ししました。9節に出てくる信仰の賜物と癒しの賜物、そして 10 節の奇蹟を行なう力です。そして、神からの啓示を受ける賜物があります。それは 8 節の「知恵のことば」と「知識のことば」そして、後に学びますが、「霊を見分ける力」も神から示されるところの、啓示の賜物です。そして預言の賜物は、これら三つの賜物と合わさって現われる場合が多いです。すなわち、神から示されていることを、人に対して語る時に、それが預言となります。自分の霊において知るだけではなく、また神に対して語っているだけでなく、人に対して語る時にそれは預言となります。

1A 預言の性質

「預言」というものの定義は、「聖霊の油注ぎによって、神の言葉を外に向かって話す」ことです。これは、生ける神のご性質の大きな一つです。私たちは詩篇 115 篇で、私たちの神は偶像と異なり、目に見えないけれども私たちを見てくださり、口は見えないけれども、語ってくださる神であることを知りました。祈りを聞いてくださる神であり、そして語ってくださる神です。神は言葉を宿しておられ、それを私たちに語ってくださるというのが、生ける神と偶像との違いです。ヘブル書 1 章 1-2 節にはこう書いてあります。「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」神は旧約時代には預言者たちを通して語られ、そして今は御子によって語っておられます。そして聖書の預言について、使徒ペテロは言いました。「それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということ

です。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。(2ペテロ 1:20-21)」

預言というと、将来を予告する言葉であると私たちは考えがちですが、確かに将来を前もって神が語られることによって、神はご自分が永遠に生きておられる方であることを証明しておられます。けれども、それは一部であり、神の言葉を預かっている漢字通りの言葉が元来の意味です。コリント第一 14 章 3 節には、「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」とあります。ここの箇所はあとで詳しく説明しますが、将来を予告する預言だけではないのだ、ということは知っててください。

1B 旧約時代

昔は、預言者たちによって神は語っておられたヘブル書にありましたが、その代表的人物はモーセでした。モーセは、神から示され、語られたものをそのまま、イスラエルの民に語り告げました。それが創世記から申命記までのモーセ五書です。そして、将来を予告する意味での預言についても、モーセは行っていました。申命記の最後には、イスラエルが神の御声に聞き従えば祝福されるが、神に背を向ければ、これこれの呪いが来ると宣言しましたが、その後の歴史はまさにそれらの呪いがイスラエルに襲いかかったので、前もって預言していたということが分かります。

そして預言者ではなく、油注ぎとして、任務としては王であったダビデも、預言をしていました。ペテロは、ダビデについて、彼が聖霊によって預言したことを述べています。「使徒 1:16 兄弟たち。イエスを捕えた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。」ダビデ自身もサムエル記第二 23 章 2 節で、主の霊が私の下の上にある、と言って確かに聖霊によって自分は語っていることを証言していました。詩篇におけるダビデの賛歌には、数多くメシヤ預言があります。間もなく主の受難日ですが、詩編第二十二篇は、彼の苦しみをはるかに超えた、メシヤが十字架上で苦しみを受ける克明な記録です。

そして「預言者」と呼ばれ、預言を語ることに特化して働きをしていた人々がいます。その代表者はエリヤです。そしてエリヤの後を継いだエリシャです。彼らの預言の言葉の内容はそれほど聖書の中に記録されていませんが、イスラエルが国家的危機に面していた時に、まっすぐに主の言葉を語る人として用いられました。そして、イザヤ書から始まる預言書には、数々の預言者の名前が書き連ねられています。

2B 新約時代

そして新約に入って、イエスご自身が神の言葉を語られて預言者であられたと同時に、神の完全な現われとして、ご自身が神の言葉そのものでありました。そしてエペソ書 2 章 20 節には、「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石で

す。」とあります。十二使徒たちがキリストの言葉を託されて、それを教えることによって、今の新約聖書は成り立っています。そして預言者が言葉を語りました。ここの預言者は、ヨハネのように使徒であり、かつ黙示録という預言書を書き記したという意味でもあるでしょうし、旧約時代の預言者という意味かもしれませんが、またその他の彼らのところにいた預言の賜物を持っている人々であったかもしれません。いずれにしても、使徒の権威に加えて預言者がいたからこそ、キリストを礎石とする土台を持ったのが、私たちの教会なのです。

使徒の働きにおいて、預言を行っていた人としてアガポがいます。「そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。その中のひとりでアガポという人が立って、世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウドエオの治世に起こった。(使徒 11:27-28)」そして使徒 21 章 10-11 節で、アガポはカイザリヤに行って、そこにいたパウロの帯をとり、それで自分の両足と両手を縛って、「この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうに縛られて、異邦人の手に渡される、と聖霊がお告げになっています。」と言いました。

使徒 13 章 1-2 節を読みます。これはアンテオケにある教会での出来事です。「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。」彼らが預言者であって、教師であると書かれています。そして聖霊が、バルナバとパウロについて任務につかせろという命令を出していますが、どのように聖霊が命令されたのかと言えば、預言を通してでしょう。パウロはテモテに対して、こう話しています。「1テモテ 4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。」長老たちに按手を受けて、その時に預言が与えられました。長老の一人が預言をしたのでしょう。その時に彼に聖霊の賜物が与えられました。何らかの力が与えられたことは、確かです。それをういようと思っていたところが、反対や試練にあって、あまり使わなくなっていく、という背景があります。だからパウロが強く励ましたのです。

そしてエペソ 4 章には、教会に預言者が与えられていることを述べています。「11 節 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」預言の賜物が与えられている人々が教会におり、そしてその奉仕を主な任務として、教会の指導者として立てられている預言者たちがいました。ただ、今日、「使徒」と名乗る人たち、また預言者と名乗る人たちは、聖書以上に自分に権威を持たせようとする人々が多く、警戒が必要です。大抵、その職務を振りかざす教会は混乱と権威の乱用が起こっています。しかし、賜物としては教会で大いに用いられるべきものです。使徒とは「遣わされる」という意味です。今日では、宣教師と呼ばれる人々がそれに該当します。そして預言者も預言の賜物としては、どんどん用いられるべきです。

ちなみに、教会において女性が御言葉を取り次ぐことにおいて、いろいろな意見があります。私たちの聖書の見解と立場もふまえて、考えたいと思います。女性は預言の賜物をもって動いていることが、聖書にはたくさん出てきます。旧約時代は、ミリヤムが女預言者であり、女たちの賛美を導いている様子が書かれています。士師デボラは、勇ましい女預言者でした。そして新約時代においても、幼子のイエス様が宮に連れてこられた時に、預言したのが八十歳の女性アンナでした。

使徒の働きや手紙においては、先ほどカイザリヤにおいてアガポがやってきて、パウロのことに付いて預言しましたが、その時、彼らは伝道者ピリポの家にいました。そこに「預言する四人の未婚の女性がいた。(21:9)」とあります。女にも預言が与えられていました。使徒2章17節には、ヨエルの預言に、「あなたがたの息子や娘は預言する」とあります。娘も預言するのです。それから、コリント第一11章5節には、「女が、祈りや預言をするとき」とあり、女が預言することが前提として、当時のコリントの状況を踏まえて被り物をしなければいけないという指導をパウロが与えています。ですから、女性が公に、また教会において祈りを捧げ、御言葉を語ることは許されていること、いや奨励されていることであります。唯一、禁じられていることは、教会の権威をもって男を教えることです。「1テモテ 2:12 私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」したがって女が、羊の群れ全体の監督者である牧会者となることについて、私たちは否定的な立場です。しかし女性が他の女性に権威をもって教えることは、テトス2章3-4節にあり、また子供であるテモテに、祖母や母や御言葉を教えていました。

2A 預言の三つの目的

預言について戻りますと、第一コリント14:1では「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」とあります。そしてパウロは、異言と預言を比べています。預言をするほうが、公の集会において異言よりもはるかに徳を高めることを教えています(4節)。それは、異言は神に向かって語るけれども、預言は人に向かって語っているからです。この違いは、異言の賜物の学びの時にじっくり見ていきたいと思います。

しかし、14章3節に、預言の目的が三つ書かれています。「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」

第一に徳を高めることです。これは、私たちがキリストにあつて徳が高められる、キリストとの歩みにおいて建て上げられることです。主の約束によって、私たちの信仰は強められます。神の恵みを知り、それによって成長します。これが徳を高める、ということです。そして第二に「勧め」であります。勧めについて知ることのできる御言葉は、ヤコブ1章22節です。「また、みことばを實行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であつてはいけません。」分かつてはいるけれども、やっていない、という霊的な状態であることが、私たちにはしばしばあります。教える賜物によって、私たちは神の真理を知り、それを理解することができます。けれども、「そら、やりなさいよ。」と言ってくれる人、その後押しをしてくれる人たちが必要です。それが預言によって、人々に

語られるのです。第三に、「慰めを与える」とあります。これは、気落ちした人にキリストにある希望を語って励ます行為です。主がすべての状況を掌握されていて、すべてのことを益として働かせてくださっていることを教えることです。そうすると、慰めを受けます。

3A 預言の賜物の使い方

1B 今日の預言

私たちが、はっきりと「これが主に語られたものだ」と確信できるものはあるでしょうか？今日の教会にも、預言の言葉は数多くあります。今日の預言の言葉は、決してすでに書かれた聖書の言葉、これ自体も預言ですが、それに反することはありません。むしろ、聖書の言葉が適切に語られることによって、それがその時に、その場所に必要とされる預言の言葉である場合が多いです。今日の預言の言葉は、その場にいる人々に、その時に与えられるもので限定的です。ですから、徳を高め、勧めをなし、慰めを与える言葉として、聖書から、また聖書に基づく語られる言葉です。

私の信仰生活にとって、最も大きかった預言の言葉は、実は私の妻を通してです。1994年にビリー・グラハムの伝道大会が東京の武道館で行われました。それは伝道集会だったのですが、妻がそこではっきりと主に語られた、というのです。「牧者チャックの下で、聖書の教えを学びなさい。」というものでした。私は、「なぜ妻に語って、主は私に語らないのか。」と怪訝になりました。けれども、それは実現していきました。1995年1月末に渡米しました。しかし、入学しようとしていた、カルバリーチャペル・コスタメサの中にある学校はもう閉じるという知らせを受けていました。しかし、教会の向かいにあるアパートを借りて住むことにしたのです。「たしかに、チャックのいるところで、聖書の教えを受けるように言われていた。」というのがその根拠でした。それでその学校は続くことになったのです。

日本の教会史において、驚くべき預言があります。キリシタンの大迫害があり、江戸幕府による禁制でキリシタンは根絶されそうになっていました。バスチャンという伝道士がいました。彼は処刑される前にこう予言したのです。「お前たちを七代までは、わが子とみなすが、それから後はアニマ(ラテン語で靈魂)の助かりが困難となる。コンヘソーロ(告白を聞く神父)が、大きな黒船に乗ってやって来る。毎週でも、コンヒソン(告白)が出来る。」¹つまり、七代目には黒船に乗って、司祭が戻ってくるという預言でした。そして七代が過ぎて、現にペリーの来航によって日本は鎖国をやめざるを得ず、長崎の浦上に教会堂を建てた神父のところに、隠れキリシタンたちが信仰を公にし始めたのでした。

2B 聖書にある規定

預言の賜物は、どのように働くかと言いますと、強い印象や思いが自分の思考の中にやってきます。初めの一文だけ語り始めますと、次に出てくる言葉があります。それを言い表すと預言にな

¹ http://homepage3.nifty.com/ouuo/chp8-japan_and_lourdes/sotome-nagasaki/004-brother-basuchan.htm

っています。それが隠れている事柄を表すことのであったり、勧めであったり、慰めるものであったりします。それが初めから用意している説教ノートにあるものもありますが、ここには書かれていないことを語る場合もあります。御霊によって与えられる促しです。ですから、後になって「ええ、こういうことも言ったのだ。」と自分で納得することもあります。

1C 秩序の神

預言を語るときに気をつけなければいけない点があります。一つは、秩序をもって語るということです。「1コリント 14:40 **ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行ないなさい。**」神は混乱の神ではありません。教会の礼拝において、不慣れな人がやって来ても、それで何をやっているのかわからないというような混乱をもたらしてはいけません。秩序を持っていれば、神がここにおられると感じて、悔い改めに導かれるのです(1コリント 14:24-25)。14章 29節には、預言をする者は、ふたりか三人が話して、ほかの者は吟味しなさいとあります。ですから、一人が待って、他の人が語り終わったら自分が語るということが必要です。それを、遮るかのように語ることはありません。

2C 預言の吟味

次に、預言は吟味が必要です。「1テサロニケ 5:20-21 **預言をないがしろにしてはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。**」すでに与えられている預言、聖書の言葉こそが私たちの信頼すべきものです。常に、聖書の言葉と語られる預言は一致しています。ですから、聖書の語られていること、神のご性質と一致しているのかどうかを吟味する必要があります。しばしば、人を脅すために預言の言葉が使われたりします。もちろん、誰かが神を恐れて、悔い改めに導かれることもあるでしょう。けれども、その人を恐れさせるために預言をする人がいるのです。私も、携拳を患難前であるとして信じているので、偽預言者であるかのような発言をした方がおられます。あなたは、こんなことを教えていれば死ぬかもしれないというようなことを話す人も、私は受けたことがありません。けれども、それは嘘です。「**神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ 8:31)**」神が罪定めはしないとされているのです、徳を高め、慰めをし、勧めをするのが預言です。

そして事実と一致しているかどうかを試されます。「主がこう言われる」と言っているのに、一向にそうになっていないのであればその人は偽預言をしたこととなります。申命記 18章 22節によると、事実となっているかどうかで試しなさいと書かれています。そうでなければ偽預言者であり、その者は石で打ち殺されなければいけません。さらに、イエス・キリストに栄光を与えているかどうかを試されます。申命記に、他の神々に仕えることを導くような者は信じるな、むしろ取り除けという命令があります。ヨハネ 16章 14節には、「**御霊はわたしの栄光を現します。**」とあります。イエス様以外のところに栄光を与えられるように導く人は要注意です。

3B 偽預言者の扱い方

ですから聖書には、偽預言者が多く出てくることが預言されています。マタイ 7 章 15 節、「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と主は言われました。使徒ペテロもこう言います。「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食べ物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままではあることはありません。」初代教会には、ディダケーと呼ばれるルール本がありました。それは、偽預言者を見分けるための本です。貧しい者のために施しなさいと指示しておきながら自分でそれを食べる者、こう言うものが来たら偽預言者だという言葉があります。「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。ヨハネの手紙第一 4:1」「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。ガラテヤ人への手紙 1:8」

「神である主はこう仰せられる。自分で何も見ないのに、自分の霊に従う愚かな預言者どもにわざわざ来る。エゼキエル書 13:3」エレミヤは偽預言者に対して語られる神の言葉を受けました。「夢を見る預言者は夢を述べるがよい。しかし、わたしのことばを聞く者は、わたしのことばを忠実に語らなければならない。麦はわらと何のかかわりがあるうか。…主の御告げ。… エレミヤ書 23:28」